『たそがれの思い』へのM．アーノルド献呈による「序文」と彼の『ミルトン』講演

渡　辺　栄太郎

The 'Preface' Dedicated by M. Arnold to "*Twilight Thoughts*" and His Address on "*Milton*"

Eitaro Watanabe

1

2冊の前著「マシュー・アーノルド研究」(第Ⅰ巻) の第一編末尾と第三編，それに「マシュー・アーノルドと諸人の救い」第一編第1章の冒頭で，アーノルドがワイトマン夫人，当時のフランシス・ルーシーと結婚する前に経験した短い恋愛事件に取材する「スイツァーランド」詩集，ほか2，3の詩，合計10首ほどの詩歌に触れてきた。これらはいずれも主人公マルグリート (Marguerite) 嬢に関するもので，このモデルが実際に誰であるかについて，詩集の刊行から凡そ100年余，英米の有名な詩人や著名な学者らから種々の論議が提供されてきた。そしてこれに決定的な結論を下したのがリーズ大学の教授をしていた ('84年当時，筆者が当学を訪問して会見) パーク・ホーナン (Park Honan) 教授の著，"*Matthew Arnold, A. Life*" の指摘であった。これに関連して，当書からその記述の一部を拾ってみよう。

Mary was now collecting German folktales, and she probably meant to reach the Hôtel Bellevue, Thun, for meeting with Arnold. (1)

メアリー・クロードは当時ドイツの民間説話を集めていた。そうしてスイスのトゥーン市にあるホテル・ベルビューに赴こうとし，そこでマシューと会う約束をしていたことを伺わせる。彼女の集めた民話が後に "*Twilight Thoughts*" と名付けた童話集となって結実し，晩年を迎えたアーノルドがそれに「序文」を書き与えるめぐり合いを持つことになる。

Back at home, he (Matthew) talked to his most worldly sister Mary or Bacco, and, on November 25, 1848, she wrote a "long letter" about "Matt's romantic passion for the Cruel Invisible, Mary Claude." (2)

最も世俗的なメアリというのはマシューのすぐ年下の妹で通称バッコと言い，彼女は「目に見えぬ無慈悲な人」メアリ・クロードにマシューが「ロマンチックな熱情」を抱いていた事実を知

らせている。メアリ・クロード（Mary Sophia Claude），この女性がこの詩集のモデルになった人そのものなのである。

所でこのメアリ・クロードとは一体どのような女性であったのか。次にはこの事について，他の資料，特にテキストとして使用するミシガン大学「アーノルド散文全集」XIの 'Critical and Explanatory Notes' を参照して少し詳細に明らかにしておきたいと思う。特にアーノルドが晩年近くになって彼女の書き物に「序文」を書くようになったいきさつから始めよう。

※　※

1883～84年の最初のアメリカ講演旅行で，アーノルドが広く世間の話題となってニューヨークに到着した数週間後，彼は「'Louis Claude' から「昔のアンブルサイドの少年」としてセントポールへ向かう途中のどこかでお会いしたいという，懇願の丁重な手紙をもらって」驚いた。――(彼の姉フランシスへの手紙，ボストン，11月８日付け，"*Letters*", ラッセル社)

講演旅行でアーノルドがウィスコンシン州マジスンの近在に来た所クロード（引退した商人とマジスン新聞は書いている）は彼に会った。公式歓迎会の合間に昔の事を語り合った。――(C. H. Leonard, "*Arnold in America*", Ann Arbor Univ. Microfilms, 1964)

そのほぼ３年後，アーノルドは姉のフォースター夫人に1886年10月21日に手紙を書いた。「あなたはクローズ一家を記憶しているでしょう。私は昔日のために，アメリカで出版しようとしている彼の姉妹の "*Twilight Thoughts*"『たそがれの思い』に，何行かの序文を書いてルイス・クロードに与える約束をしました。僕はこの小さい本を注意深く通読しなくてはならないのですが，今では２ページの序文を書くことで，あなたが想像するよりもっと面倒を感じています」と述べていた。

29日になると彼は娘のルーシー・ウィットリッジにこの序文を書き終わったことを告げ，その出版される本の物語は40年以上も前の事だと知らせている。

Mary Sophia Claude は１，２年アーノルドより年長で，1820年代の終わり頃リバプールの商人であった彼女の父の死後，母と３人の姉妹，１人の兄弟（Louis）と引越してきた。母親はドイツ生まれであった。1836～46の10年間を除き，彼女は1912年２月24日に92歳で死を迎えるまでアンブルサイドかその近隣に住んでいた。そこでアーサー・クラフや彼の姉妹 Ann Jemima を知り，そして当然アンブルサイド，ライダル，グラスミアーの社交界にも通じていて，アーノルド家とは季節的につき合うことになり（別荘を所有していたことで），1834年から42年のアーノルド博士（父）の死を経て Fox How がアーノルド夫人の家になるまで，その後永く当地に住んでいた。Hartley Coleridge（批評家・哲学者 Samuel Taylor C. の子息でマシューの当時の遊び仲間）は，1847年４月10日に彼女（メアリ・クロード）のことを記して，「顔や姿はなお美しく，彼女の開花期は時ならず悩みと物思いで青白かったが，心では彼女は事の外美しい」と述べていた。――("*Letters*", G. E. and E. L. Griggs. London ; Oxford Univ. Press, 1936)

またホーナン教授の "*Matthew Arnold, A life*" からの記述として記した「目に見えぬ無慈悲な

人」(the Cruel Invisible) とメアリ・クロードを評してマシューの情熱を伝えた妹バッコの手紙について，ニュージーランドに居た弟の Thomas は，その記事を「殊のほか何物にも増して面白い」と母に書き伝えていたという。——(Thomas Arnold, "*New Zealand Letters*" ed. James Berton ; Univ. Auckland, 1966)

その後はアーノルドとメアリ・クロードとのロマンスについて，ケネス・アロットの論説 "*Matthew Arnold and Mary Claude*"(1969)，パーク・ホーナンの "*A Note on Matthew Arnold in Love*" (1971) の他，近年世紀末には新しい伝記的作品が幾冊か刊行されている。

一方，メアリ・クロードの "*Twilight Thoughts*" は，1848年に Chapman and Hall に依って刊行された小供たちのための，12編からなる楽しい小さな田舎物語である。クロードが "M. S. C." のイニシアルで世に出した幾つかの小供への本の１つであった。1887年のボストン版には３つの物語が追加され，当書が作者名を全部表示した彼女の本の唯一のものとなっている。

以上にアーノルドが結婚以前，青年時代の情熱の対象になったとされるメアリ・クロードの物語本へ「序文」を書いたいきさつ，それにクロード自身について，結構詳しく述べてきたつもりである。それならばこの序文にはどのようなことが書かれたものであろうか。マシューにとって40年以上も前の事とはいえ，彼の感懐を探ってみるのにその本文を検討してみるのには，興味が持たれるであろう。そんなに長いものではないので最初の１段落のみの原文を提示してその調子を見本とし，その上で全訳を試みてこの内容を探ってみることにしたい。

Preface

[To Mary S. Claude's *Twilight Thoughts* :
Stories for Children and Child-Lovers]

How can I refuse a word of preface to these stories? They carry me back to the fells and rills of Westmoreland, to long past days when Westmoreland was the Westmoreland of Wordsworth, and Hartley Coleridge, and when the authoress of these stories moved in her youth and spirit and grace through that beautiful region, herself a vision worthy of it.

She was connected with Germany, and……(3)

序　文

[メアリ・S・クロードの「黄昏(たそがれ)の思い」へ寄せて：
小供たちと小供を愛する人たちへの物語]

どうして私がこの物語への序文の言葉を拒否できようか？　これらは私をウェストモーランドの高原地や小川に引き戻し，ウェストモーランドがワーズワースやハートレイ・コールリッジのウェストモーランドであった遙かな過去の日々に，この物語の女流作家があの美しい地域で，彼女自身それに値する姿を通して，青春と魂と美しさの中で行動していた頃のことである。

彼女はドイツと関わりを持っていた。それにジェン・パウル・リヒターのドイツと，ハンス・クリスチャン・アンデルセンのデンマークとの北欧の魂が彼女の物語の中にあり，その自然を懐かしい思いで，動物・植物・小石や雲へのその優しい帰属を，人間の生命や感情の上に描写したのである。幾多の遊び心いっぱいのユーモアの筆致，数多くの道義的でまた深く人間的な暗示を，彼女はその天才たちに負うている——でもこれらのものは，彼女の内部でほぐれずに，結びついているのです。

だが「侵害者への通告」，「牧草地」，「小川」といったような物語に現れる人たちはワーズワースの近隣者と詩の視聴者なのであって，開発による美しい自然のロマンスへの侵害，それと侵入者による農夫と小供の自由への侵害に反対するワーズワースの抗議についてのものです。「私は保守党にはどんな尊敬の念も持っていない」と彼はとても真実を込めてグラッブ・ロビンソンに言っていました。「でも自分にはチャーチスト」（人民憲章運動家）の要素が多分にあるのです」と。そしてまさにこのワーズワースのチャーチズムが，この「侵害者への通告」に霊感を吹き込んだのです。

けれども私にとって，この物語の主な魅力は彼らを吹き抜けるウェストモーランドの吐息の中に，またまさに彼らがそこに生まれたことを，人に思い出させる筆致の中にあるのです。冷たく小さい新しくできた小川が「青白くちっぽけな花々の間で，長いうな垂れたコケに沿って柔らかく流れて」と，それから「セキレイやのびたきが世話しなく石から石へと飛び回り，或いは山羊が浅い小波の寄せる瀬を渡るのを恐れ，哀れにメエと鳴く間にも静かな水たまりで居眠って」とか，遂には「サイカモカエデの木影の中，小さな灰色の小屋小屋，また枝垂れるハンノキ，幅広い灰色の踏み石」に達して——これこそがウェストモーランドであり，何という真実味，何という美しさを以て描かれたものでしょうか！　そうしてそこに，この物語では，自然があり，寓話とユーモア，悲哀とモラル，それにチャーチズムが存在している——あらゆる味わいのある何物かなのです。アメリカも亦こうした物を所有し，読んでみるのは結構なことです。こちらで喜びを与えてくれたように，アメリカでも喜ばれますように。またこちらであったように稀小本になったり絶版になったりして，わずらうこともないように！

最後の言葉からは，遙か夢のように過ぎ去った青春の日の恋人への配慮が伺える。ただ彼女がこう書かれて嬉しかったかどうかは，彼女の気の取りように依るのではないかと思われる。しかしこの手紙の本文を紹介する前に，アーノルドが講演旅行でアメリカに滞在し，メアリ・クロードの兄弟ルイスと会見したいきさつを述べておいたので，この「序文」の書かれた状況と趣旨も，かなりに良く理解できると思えてくる。ワーズワースやウェストモーランドでの仲間の思い出，イギリス湖水地方の風景や父トーマスの別荘での生活など，遙かな過去への思いが，如何ほどかはマシューの脳裡をよぎっていったことだろう。また物語の内容から当時のチャーチスト運動[(4)]のことが語られ，ワーズワースがこの運動と深く関っていたことをも知らせてくれている。

2

Milton（ミルトン論）

アーノルド第2回目の訪米1886年の7月，彼は次女末娘のエレナー（Eleanor）と共に，フィラデルフィア・レッジャー誌の所有者G. W. チャイルズ（Childs）夫妻の饗応で，ニュージャージー州の海岸ロングブランチで数日を過ごしたことがあった。その後1年半程して，チャイルズ氏がウェストミンスターのセント・マーガレット教区教会へ，ミルトンとその再婚の妻に敬意を表して「記念窓」(5)を献納した。その折アーノルドの長年の友人であった副監督のファラー（F. W. Farrar）氏が，この贈与品の話を出して且つ始末する立場にあったが，彼はその除幕式に出席して演説することを要請された。その日程は2月の18日と設定され，アーノルドはこの申し出を引き受けた。彼はまた除幕式の前日17日にニューヨークに居る娘のルーシー・ウイットリッジに手紙を書き，演説を終えた翌日，その内容を'*Century Magazine*'の編集長R. W. Gilder氏に送付すると伝えていた。当の除幕式の受付けは教会法衣室で3：30に行われ，出席したロバート・ブローニングの記録に依ると，参加者は少数の私的な友人に限られ，その中にブローニングとファラー副監督，下院議長アーサー・W・ピール，アメリカの閣僚エドワード・J・フェルプス，レッキー氏の他はアーノルド夫妻とその末娘，その他であった。この演説は30分以内のものにまとめられ，内容はアーノルドの死後センチュリー・マガジーンの5月号に公表された。これは後，もともとアーノルドが計画していた"*Essays in Criticism, Second Series*"（批評論叢，第2集）の中に，出版社の発案によって追加されることになったものである。

※　※

The most eloquent voice of our century uttered, shortly before leaving the world, a warning cry against 'the Anglo-Saxon contagion.'

「我れらが世紀の最も雄弁な声が，世を去る僅かまえに，「アングロ・サクソンの感染」に反対して警告の叫びを発した。」

この書き出しで，この「ミルトン」論は始まる。アングロ・サクソン人種が発展し，増大するその社会経済力，物質的利益の拡大，社会での俗悪な人生の見方の浸透など，これらが最大限の精力を注いで追求されている。こうした風潮が世界の全国家を侵略し，圧倒してしまうことについての恐れ，これを「アングロ・サクソンの感化」(the Anglo-Saxon contagion）という預言者の警告として採(と)り上げたのである。アーノルドはこの言葉を引き出して自分たちとその母国イギリスの政策，それとアメリカ合衆国の急激に成長する偉大な発展の影響，特にその植民地政策への危惧を表明したものであった。特に世上，一般普通の人びとにこの発展を過度に賞揚し，真実にその行為が高度に優れた救済となるべき「すべての正当な卓越性の規準」(all right standard of excellence）を喪失する危険を指摘したものである。具体的には英国だけでなく新興アメリカの国

家・社会制度，硬直化した社会風潮，自由と平等，力とエネルギーの問題に関わっているとし，特にアメリカに対しての懸念が表明されているようにも見える。(尤もこの演説から110年余を経た今日，21世紀を迎えてアメリカが唯一の超大国として存在し，ネオコン（新保守主義）などという勢力が力を得ている時代であるが。）この時アーノルドが米国滞在中に大いに饗応を受けたチャイルド氏が，たまたまフィラデルフィアから来訪して，ミルトンの名誉を賞揚する「飾り窓」を寄贈することになったのである。

この「ミルトン」論は30分以内に演説する内容になっているのでそう長文ではない。従ってアーノルドのミルトン観を幾つかに分け，検討を加えていくことにしたい。

（1）ミルトンにはシェークスピア以上に我れわれに反省と教化を暗示するものがある。彼は2番めの妻カザリン・ウッドコックと僅か1年ほどして死別したが，妻の愛と優しみ・善良さに包まれていたこの時が安らぎの至福の時代であった。ミルトンはクロムウェルに仕え，妻亡き後盲目となって18年間生き長らえ，ウェストミンスターのセント・マーガレット教区に住んで創作を以て心の慰めとしていた。この頃書かれた作品が "Paradise Lost" の一部と "Paradise Regained" 及び "Samson Agonistes" である。

（2）我れわれの対社会思考理念の問題点と現実世界の展開との間で，前述のアングロ・サクソンの感化という少なくとも全面的には肯定できない強固な影響力を考慮すれば，先のミルトンの教化的な要件に留意する理由と価値が見出されるとアーノルドは想定している。

If to our English race an inadequate sense for perfection of work is a real danger, if the discipline of respect for a high and flawless excellence is peculiarly needed by us, Milton is of all our gifted men the best lesson, the most salutary influence. (6)

「もし我れわれのイギリス民族にとって作品の完全さに対する不充分な感覚が本当の危険であるなら，もし高度で欠陥のない卓越性に対する尊重の訓練が我れわれにとって特別に必要とされるのなら，ミルトンはあらゆる我れらの才能ある人たちの中でも最善の教訓となり，最も有益な影響力を持つことになる。」

彼はミルトンのリズムと表現法（diction）の確実で欠陥がない完全さはヴァージル（ウェルギリウス）やダンテに通ずるもので，イギリスの文学と芸術の中で，他の誰一人としてその顕著さを具有する者は居ないと言っている。ただここで問題なのは，ミルトンの詩が如何に完全で「アングロ・サクソンの感化」に指摘された欠陥を克服した作品であったにせよ，それは飽くまで詩文学上のことであって対社会的な意味合いとは別物であるということである。ここにはアーノルドの詩文学の社会性に対する過大な価値評価が，彼の「詩歌の研究」(The Study of Poetry）の冒頭の言葉 (7) に見られたように，依然存在していることを示すものであろう。

（3）トムソン，カウパー，ワーズワースなどミルトンを学んだ立派な詩人のすべてが，ミルトンに習い，その様式（form）を採用したが，表現法とリズムでしくじっている。真に高度で純粋な文体（style）からミルトンは逸脱していないが，彼らには逸脱がしばしば見られる。シェーク

スピアでさえ，力強く豊かで魅力的でも，完全な文体の確かさは有しない。ミルトンの 'Paradise Lost' では一部始終表現法（言い回し）とリズムが一定して，偉大な文体を成している。また正義はピューリタン抒事詩にとって不可欠なものであるが，それは構成技術（*architectonics*）の中に果されていない。この点ミルトンの力量は著しい。

That Milton, of all our English race, is by his diction and rhythm the one artist of the highest rank in the great style whom we have ; this I take as requiring no discussion, this I take as certain, (8)

「ミルトンは，全イギリス人種の中で，彼の表現法とリズムに依って我れわれの有する偉大な文体では，最上位にある１人の芸術家である。この事では議論を必要としないと思うし，これは確実だと考える。」

（４）詩歌と芸術の強力な力は今や広く認識されているが，その力は主に偉大な文体の高度で稀な卓越性の基礎となる洗練性と高揚の中に存在する。その上我れわれ英国民以上に，この洗練性と高揚を必要とする人種はいない。その壮大な源泉はミルトンなのである。ではミルトンの何にその極上の著しさが負っているのかと言えば，それは一言で言って，他者の真似のできないミルトンの天才によっているという。

To nature first and foremost, to that bent of nature for inequarity which to the worshippers of the average man is so unacceptable ; to a gift, a divine favour. (9)

「第一にまず真先に，普通の人の崇拝者にとってとても受けいれ難い不平等性に向けたあの天性の傾向に，天賦即ち神の恩寵に負っているのである。」

宗教的また政治的論争でのミルトンは，恐らく家庭での生活も含めて，優しさの不足と厳しさの印象でそのイメージが損われかねないが，詩歌でのミルトンは慎み深く，「永遠の神」(Eternal Spirit）への信心深い穏当な偉人であった。

Continually he lived in companionship with high and rare excellence, with the great Hebrew poets and prophets, with the great poets of Greece and Rome. (10)

「継続して彼は高度で稀な傑出性と連れ立って，偉大なヘブライの詩人や預言者と，また偉大なギリシア・ローマの詩人たちと仲間となって生きたのである。」

ヘブライの精神は壮大なイギリス聖書に移され，ギリシアとローマの韻文はその翻訳再生の不可能さに拘らず，ミルトンの天性に依って解決できた。ミルトンこそは，これら古代人の偉大な文体を英語で継承できた稀有の詩人だ，と断定評価しているのである。

（５）アーノルドは最後にウェルギリウスの '*Aeneid*' の例を引き，――ジュノーが夫のジュピターに懇願して，ツルナスとイタリアが侵略者のトロイアに敗れても，トロイア人のイタリアでなくイタリア本来の美徳が守られたように，――あらゆるアングロ・サクソン性の洪水の中でも，ミルトンが真の偉大な文体を確立して優れた伝統の言語・信仰・道義を守って勝利を収め，大西洋の両岸にその卓越性の英語のパン種を維持し続けるであろうという，期待の言葉で講演をしめくくっている。

The English race overspreads the world, and at the same time the ideal of an exellence the most high and the most rare abides a possession with it for ever. (11)

「イギリス民族は世界に伸び広がっている。また同時に最も高度で最も稀有な卓越性の理想は永遠にその卓越性を所有し続けることにあるのである。」

※　※

アーノルドの「詩論」及び「詩歌の研究」に述べられたように，彼には際限のない詩の大衆性から，詩は人間生活一切の現象を人の心で捕え，その浸透によって人間世界に変化をもたらす原動力となるものだという考え方があった。そこで彼は当時大きく発展しようとしていたアングロ・サクソンの感化（the Anglo-Saxon contasion）という社会的国際現象を取り挙げ，これを詩歌の世界にダヴらせているふしもあるであろう。アングロ・サクソン民族発展に供う欠陥を補う意図で，ミルトンに見るような「最も高度で稀有な卓越性」を詩歌に託してみた所で，この社会現象は率直な所どうなるわけでもあるまい。たとえ社会事情と詩歌の構成に共通する点があるとしても，やはり詩歌に対する過大評価と論理の無理，自己憧着への懸念は避けられないのではないか。これが先ず第一。

ミルトンの詩へのアーノルドの見解としては，対象を代表作の "Paradise Lost"（失楽園）とこれに続く "Paradise Regained"（復楽園）及び "Samson Agonistes"（闘士サムソン）に限ってみれば，彼の詩作を「高度で稀有な卓越性」と評したのは順当であるとも言えよう。ミルトンは若年の詩作で韻律・思想に雄大高潔な素質を示したこともあるが，クロムウェルの共和政の下で公僕，論争家として活躍し，王制復古後はそれまでの極度の緊張と努力から失明し，共和国への理想は敗れ，財産は没収されて悲壮堅忍の生涯を送った。（そのミルトンらの主張は，後に海を渡って新大陸に，アメリカ合衆国の基礎理念，ピューリタニズムとして結実し，今日唯一の超大国としての隆盛をもたらすことになったのであるが。）彼の最大の傑作 "Paradise Lost" では主要人物の堕天使 Satan に，自由のために闘って王党の圧迫を忍びつつある自己を投影したとの解釈もなされている。「「闘士サムソン」における厳粛な人生観と，何らの文飾をも用いずして，しかも崇高な詩体とは，当時の淫らな世風に対し毅然として節を守った清教徒詩人の面影を彷彿せしめる」(12) という批評には，ミルトンの面目躍如たるものがあるであろう。

最後にこの「失楽園」冒頭の祈願の壮重な響きを，ほんの一部だけ記録しておきたい。

'Of Mans First Disobedience, and the Fruit
Of that Forbidd'n Tree, whose mortal taste
Brought Death into the World, and all our
woe,
With loss of Eden, till one greater Man
Restore us, and regain the blissful Seat,
Sing Heav'nly Muse, that……

さてアーノルドにとっては批評に手を染めて未だ日の浅い頃，このミルトンの詩を，シェークスピア，ダンテ，ウェルギリウスの詩文と併せ，思想の高尚で深遠な人生への適用を達成した文体として *'grand style'*「壮重体」[13] などと称していたことがあった。そうしてこの "Milton" 論そのものが，アーノルド最後の文芸批評論となったのである。

[註]

(1) "*Matthew Arnold, A Life*", by Park Honan : McGraw-Hill Book Company, New York, etc. p.151, *l*.18.
(2) Ibid., p.151, *l*.26.
(3) "*Matthew Arnold, the Last Words*", 〔The Complete Prose Works of M. A.〕 XI : Edited by R. H. Super, Ann Arbor, the Univ. of Michigan Press. p.120, *l*.1.
(4) Chartism；チャーティスト運動（1838～48）。イギリスに起きた急進主義政治運動で，議会の毎年開会，普通選挙の実施，代議士資格としての財産制限の撤廃など，6項目の法案（People's Charter，人民憲章）の議会通過を迫った。その主義主張。
(5) (memorial) window；教会の窓にはめ込む聖者などを形取ったステンドの窓ガラスであろうと推定される。
(6) "*Matthew Arnold, the Last Words*", by R. H. Super. p.330, *l*.26.
(7) *Cf.*『マシュー・アーノルドと諸人の救い』；渡辺栄太郎，文化書房博文社。p.229-p.230.
(8) "*M. A., the Last Words*", by R. H. Super. p.331, *l*.20.
(9) Ibid., p.331, *l*.33.
(10) Ibid., p.332, *l*.17.
(11) Ibid., p.333, *l*.18.
(12)『英米文学辞典』第三版，研究社。p.866, *l*.12.
(13) *Cf.*『マシュー・アーノルド研究』(第Ⅰ巻)；渡辺栄太郎，文化書房博文社。p.73, *l*.7, p.100, *l*.25.

(Sept. 23, 2003)